

「愛を知るとき」

ヨハネによる福音書 21章 1節～14節

説 教

本庄侑子 牧師

主イエスが十字架につけられたのち、ペテロをはじめ他の弟子たちは、エルサレムを離れて彼らの出身地である「テベリヤの海べ」、すなわちガリラヤに戻っていました。主イエスが、そこで弟子たちと会うことを願われたからです。「イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。」(マルコによる福音書16章7節)と言われた弟子たちは、復活の主に再びお会い出来ることを期待していたことでしょう。しかし、そこに主イエスの気配は感じられませんでした。

「わたしは漁に行くのだ。」(3節)沈んでいくみんなの心を奮い立たせるように、元漁師のペテロが言うと、「わたしたちも一緒に行こう。」(3節)他の弟子たちも声を揃えます。弟子たちは夜通し網を打ち続けましたが、その夜はなんの獲物もありませんでした。

主イエスは十字架で死んだ後、復活されたと信じさせられたけれど、そのお姿は見当たりません。やっぱりあれは夢幻だったのか…疑い、あきらめ、そんな重い空気を振り払うかのようにして船を出したにも関わらず、結局何もとれなかったのです。やがて夜が明けたころ、ペテロは、舟を岸に戻すしかありませんでした。かつての漁師としての自信さえも打ち砕かれて、弟子になる前と何一つ変わらない生活が待ち受ける、昔の職場、あのガリラヤの岸边へと失意のうちに戻らなければなりません。

しかし、そのような時に、そのガリラヤの岸边に、主イエスは立っておられました。「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう。」(6節)と言われた弟子たちが網をおろすと、不思議な手応えが全身に伝わってきました。

「あれは主だ」(7節)と弟子のうちから声があると、ペテロはすぐさま海にとびこんで、主に向かって全力で泳ぎました。主イエスは、確かに彼らより先に来て、彼らが漁から戻るのをあえて待っておられたのです。主イエスは、初めてペテロを見出し、人間をとる漁師にしようとして声をかけられた時からずっと、この時を見据えて、この場所で待っておられたのでした。

的外れな言動を繰り返して、ついには裏切って逃げてしまうペテロを、本当の意味で人間をとる漁師にするために、主はこれまでの時をかけてくださったのでした。十字架の苦しみも、死と復活も、全ては主の徹底的な愛とご計画の

うちにありました。そして、ペテロは主の愛を知ったのです。

泳ぎ着いた先はもはや、昔の職場、弟子になる前のあの生活ではありませんでした。全く新しい人生の岸边でした。自分の自信や能力や覚悟によるのではない、復活の主の召しによる新しい岸边です。ペテロは、このとき本当の意味で主と出会い、そして主の愛を、主が与えてくださる新しい歩みを受け取り始めたのです。

弟子たちが復活の主とお会いしたのは、ガリラヤでした。直前までいたエルサレムで、すでに復活の主と出会い、「聖霊を受けよ。」(20章22節)と息を吹きかけられたのち、彼らにとっての昔の職場、弟子になる前の生活の場であるガリラヤに帰されたのです。そこは、苦い思い出が詰まっていた場所かもしれません。

私たちにもまた、ガリラヤがあります。礼拝で復活の主と出会っていただいて、洗礼を受けられ、聖霊を吹き入れられて送り歸されるそれぞれのガリラヤ。苦い思い出が詰まっている職場や家庭、学校、生活の場があるのです。復活の主が遣わしてくださる場所であるはずなのに、そこに全く主の気配を感じられず、何も変わらない生活の中で、失意の夜明けを迎えることもあるでしょう。しかし、復活の主が立っておられたのは、そんなガリラヤの岸边、夜明けの岸边でした。復活の主の声は、無我夢中で魚をとろうともがいている夜の海ではなく、何もとれず疲れ果てて帰ってくる夜明けの岸边から聞こえてくるのです。

「さあ、朝の食事をしなさい。」(12節)弟子たちが陸に上ってみると、主は炭火をおこして、魚とパンを用意して待っておられました。主は、それらを自らの手で、彼らに分け与えられたのです。私たちもまた、今その場所に居ます。主の食卓を囲む礼拝に招かれたからです。力尽き疲れ果てて帰ってくる岸边で、朝の食事をいただき、私たちは主の愛と哀れみに満たされます。復活の主は、この礼拝から始まる新しい週も、罪深く無力な私たちを、神の国のために、人間をとる漁師として用い抜いてくださいます。私たちが今朝この礼拝に招かれたのは、そのしるしに他ならないのです。

(記 説教要約奉仕者)